

8・5 はこぶアンケート抄—Q.私の通学体験—

Facebook「とある民俗学講師の補足メモ」

・移動のための技術と戦略／移動がもたらす空間と社会の発見／移動が生み出すアクティビティと人間関係

【徒歩】愛知県日進市にある日進西中学校に通っていた。田舎で、祖父母と共に暮らしていたこともあり、ご近所との繋がりが強く、通学中に近所のおばあさんからとても大きな白菜を貰った。貰えること自体はとても嬉しかったのだが、学校に白菜を持っていくわけにはいかない。通学中であるといっても私が遠慮していると思って、すごい勢いで白菜を渡してきた。結局断れず、半分以上進んだ通学路を白菜を抱えて引き返した。学校には遅刻した。白菜はおいしかった。

【寄り道】私の通っていた砺波南部小学校までの通学路には廃墟があった。その廃墟は植物が群生しており、異臭を放っていたものの、蜜が甘い花が生えていてよく友人と吸いに寄っていた。その中でこの植物は安全か、等々、廃墟を楽しむために調べるのを繰り返すうち、キライだった勉強がどんどん好きになっていった。

【集団下校】私は香川県高松市の田舎の方に住んでおり、通っていた小学校も小さめ。下校時は、生徒が正門前に集まり、みんなで標語（「横断歩道は手を挙げてわたりましょう」「地域の人にあいさつをしましょう」など）を言って、一斉下校した。私の中ではこのスタイルが当たり前であったため、中学で集団下校じゃなくなった時は、とても不思議な気持ちになったのを覚えている。その日の最後のチャイムが鳴った後、周りの生徒が各々好きなように動き出す中、「え？もう帰っていいの？一人で帰っちゃっていいの？どうしたらいいの？」とムズムズした気持ちになった。

【坂道】神戸市灘区にある神戸高校に通っていた。学校は山の上で、毎日阪急王子公園駅から歩いた。阪急六甲駅から神戸市バスで行くことも出来るが、最後に絶対に登らなければならない坂があり、その名も地獄坂。部活のトレーニングで地獄坂ダッシュは恒例だ。数学の先生が言っていたのだが、傾斜はだいたい7～8度。毎日の積み重ねにより、所要時間は1年の時は10分弱だったのが3年の時は5分もかからなかった。太ももが鍛えられた。

【雪】山形市は盆地のため、県内の他市町村に比べれば雪は少ないですが、そうはいっても毎年30～60センチほどの積雪があり、冬の通学はなかなか大変です。徒歩15分ほどの高校に通っていたのですが、私の実家と高校の間にある他の高校を突っ切ることでショートカットできました。その道はショートカットする人くらいしか使わない道だったので、雪かきなどはされておらず、先人の足跡の上を歩くことで負担を軽減していました。足跡は毎日利用されて冬の間ずっと残り続けます（大雪など降らなければ）。動かぬ不正の証拠を残しながら毎日ドキドキして登校していました。

【自転車】高校3年間、和歌山県白浜町から田辺市間の往復24kmを自転車通学した。印象的だったのは海沿いの道の風の強さ。風で前に進めないで、海沿いの道だけは他の生徒も自転車を降りて手で押しながら通学していた。時には息が出来ないほどの強風が吹くこともあった。唯一楽しみだったのは夏休み明け。まだまだ暑い季節であるが、自転車でゆるやかな坂道を下るスピードと、朝の気温でほんの僅かに秋を感じられ、とても清々しい気分になった。

【バス】大阪北部の高校に路線バスで通っていた。乗客がボタンを押すと次の停留所で停まる仕組みで、普段は、同じ高校の誰かがボタンを押すのだが、ごく稀に全員が押し忘れ、みんなが一つ先のバス停で降りて歩いて戻ることがあった。高校前のバス停を押し忘れにより通過してしまったときは、何とも言えない微妙な空気となった。

【自動車】台湾・台中市での高校時代、毎朝両親が車で送ってくれていた。自宅から学校までは車で20～30分ほどかかり、朝の渋滞を避けるために、毎日6時半には家を出発した。車内では母とその日の予定を話したり、眠そうな私のために父がラジオを流してくれたり、家族の温かさを感じる時間でもあった。帰りは仕事帰りの母が迎えに来てくれることが

多く、たまに待ち時間が長くなっても、車の中で好きな音楽を聴きながら一人でぼんやり過ごすのが好きだった。台湾は交通状況が悪く、特に台中市はバイクが多く、信号無視や歩道上の走行も珍しくない。そのため、一人で通学するのは非常に危険とされ、保護者の送迎が一般的である。日本に来てからは、子どもたちが一人で公共交通機関を利用しているのを見て驚いた。交通事情のみならず、社会の安全意識や教育観が深く反映されていると実感している。

【電車】中高6年間、家から自転車またはバスで近鉄五位堂駅に行き、近鉄大阪線で鶴橋駅に行きJR環状線に乗り換え、寺田町で降りて目の前の学校に着く、という通学だった。近鉄大阪線は、快速急行、急行、準急、区間準急、普通という種類がある。鶴橋駅から五位堂駅まで、快速急行だと23分ほどだが、ほぼ座れない。普通や区間準急などは1時間ほどかかるが、空いていて座れる。私は時折、気分転換に普通列車や準急列車に乗って、座ってゆっくり帰るのが好きだった。親と喧嘩して帰りたくない時、ボーッと考え事をしたい時、ヘトヘトになった期末テストの最終日、受験勉強で疲れてどうしても眠りたい時など。普段止まらない人気の少ない駅に停まって、扉が開いた時に入ってくる風や匂いも好きだった。

【駅】大阪市の十三にある北野高校に、箕面市から阪急電車通っていた。十三という土地は中型の歓楽街であり、高校の恩師いわく、十三は銀行と饅頭屋とパチンコ屋と風俗街しかない町である。実際、府下一番の進学校がある場所とは思えないほど治安の悪い場所であった。一番記憶に残っているエピソードは、朝一に通学している最中、路地でキャバ嬢がホストらしき男を締めている現場を目撃したことで、閑静な住宅街しかない箕面との違いに心底驚いた。

【満員電車】中学、高校時代は阪急京都線と京都市バスを使って通学した。阪急桂駅から西院駅まで乗り、西大路四条から北野白梅町まで市バスを使った。駆け込み乗車をする人がいて、車掌の方が扉を閉めるのを一瞬待ってくれるのが日常茶飯事であった。また、関東に半年ほど住んだことがあり、京浜東北線の鶴見一品川間、山手線の品川―高田馬場間を利用した。JR東日本では、駆け込み乗車をする人はほとんどおらず、いたときには一斉に非難されるような空気だった。駆け込み乗車をした人間は乗ってから白い目で見られ続け、車掌が「駆け込み乗車はご遠慮ください」と、キレていることをまったく隠すことのない声色でアナウンスしていた。悪いと思うものにひたすら誹謗中傷を続けるSNS社会が現実世界にそのままあらわれたようだと、駆け込み乗車に対する認識の地域差を感じた。

【地方鉄道】私は山口県岩国市川西にある岩国高校に気動車（ディーゼルカー）で通っていました。最寄の川西駅は単線で1.5時間に1本ディーゼルのワンマン列車しか来ない典型的な田舎駅で、宇野千代の生家が近くにあるので宇野千代の顔が至る所にありました。印象深かったのは、卒業式の日、いつも通り列車に乗って帰る途中、運転士の人がお祝いのメッセージをアナウンスしてくれたことです。メッセージ自体はありきたりなものでしたが、まさか運転士が祝ってくれるとは思わず、とても驚きました。利用者の8割くらいが岩国高生のローカル列車だからこそと思いました。

【車窓】奈良市の新大宮にある高校に電車通っていた。近鉄大和西大寺駅と新大宮駅の間、車窓から、雄大に広がる平城宮跡と荘厳な大極殿が見えた。奈良時代の面影もない草原になった平城宮跡には、復元された大きな赤い大極殿が堂々と立っており、平城宮跡の真ん中を突っ切っている近鉄奈良線の車窓から、ありありとその姿を見ることができる。毎朝奈良時代の風を感じながら通学していたが、2年生で高校が移転したため、毎朝大極殿を拝むことはなくなってしまう。もう少しありがたがっておけばよかった。

【車内の人】大阪の中之島駅から龍谷大前深草駅まで京阪電車を使って通学していた。帰りの電車も曜日によってほぼ決まっており、電車内では見たことのあるような人と一緒になる。その中でも、丹波橋で午後5時半ぐらいの満員電車の中、カバンから鯖缶とタッパーに入れたご飯を取り出し、ドアの前に座り込み食事を取り始めた人のことは印象に残っている。他にも土曜日の昼12時ぐらいに電車を待っていると、乗り込む時に何故か絶対に足をけってくる人が深草駅に毎回いた。現在はJRを使用しているが、自分の中では京阪はそれ以上に印象的な人が多い気がする。